

# 希望の生成と現存

## —情動の理論に向けて—

ベン・アンダーソン\*  
(森 正人訳)\*\*

Anderson, B., *Becoming and being hopeful: towards a theory of affect*  
*Environment and Planning D: Society and Space*, 2006, volume 24, pp.733-752.  
Copy right received from Pion Ltd (<http://www.envplan.com/>)

本稿は社会・文化地理学において情動や感情に関する関心が近年高まっている中で議論される理性以上と理性以下という二つの明示的な理論を概述するために、希望がどのように現れるのかを描こうとしている。本稿の最初の部分では理性以上のものと以下のものが情動affect、理性的感情feeling、感情emotionの三つの様式に広がっていることを述べる。この出発点から、私は情動の現れと動きが「過剰」に現れているために生の形態の増大を招いているというような情動の研究が持つ前提に疑問を投げかける。第二部では録音された音楽が「気分が良くなる」ために個人に用いられる二つの例を挙げながら、希望や希望に満ちていることの出現を描写することによって、別のより哀愁的な説明を例証する。縮小の多様な形態における分裂や崩壊から現れながら、希望に満ちていることは身体を「外部」との接触へと誘う。希望がつねに「いまだ生成されていない」情動的、感情的なものを歓迎するのだと暗示する悲劇の感覚のために（にもかかわらずというよりは）、希望に満ちていることの生成とそうであることは情動の理論に関する一連の問題を提起する。それゆえ結論部では本稿の二つの部分が、情動の理論と情動的な文化の政治学の両方に対する希望から思考することの含意を熟考することによって結びつけられる。

「希望・・・とは、未だ来ぬ場所、入口であり最終的な中身が  
変わる事なき不確実性によって記される場所にある」

Bloch (1998, p.341)

「表出の不確かさは・・・危険なままで、信頼こそが希望の真実なのだ。

二つはその中で遭遇する」

Bloch (1986, p.112)

### 1 はじめに—情動をとおして希望を考える—

本稿では情動的 affectual かつ感情的 emotional な生活の地理を作り上げる多様なプロセスや様相に呼応する語彙を概述するために、希望がどのように現れるのかを考える。希望、そして希望することは近年の西洋の日常生活における情動的な織物の中で自明の部分となっている。日常生活をつなぎ合わせる希望の小さなスケールから多様な集合性を作り上げるより大きな希望の流れのスケールに至る多様なスケールを横断する社会的文化的生活を、希望の循環や分配は活気づけたり弱めたりする。にもかかわらず、希望を熟考することは、説明あるいは描写という行為にとって理解しにくいまま残されている何か

に触れている。社会科学や人文学は、希望を思考しようとしてきた。希望は容易に確認され、その量的な存在あるいは不在が目されるが、希望の現れや作動の様式は矛盾したままなのである。空気中の非物質的事柄、あるいは地平線の予言的な形象において感得されるものと同様に、不確定な何かが無だ生成されていないことを希望は先取りしている。Bloch (1986, p.188) は、一連の希望を描きながら、「それらすべての接触はそうのようにいまだ来ていないのだから、それらをちらり見ると言うことは依然として予見でしかないし、それらが生じていることを感じることもやはり予感でしかない」と言う。だから希望は可能性の創造であることを開示したり、Marcel (1965, p.86) の言葉では「リアリティが起

\* グラム大学地理学部

\*\* 三重大学人文学部

こるかも知れない報いをあふれさせる基礎条件」と関係しているという理由から、希望についての直感的な理解が存在するのである。たとえば、現実に存在する資本主義の文脈の中に希望の空間を成立させている、近年の信用組合や中古品の交換などのようなオルタナティブな経済的活動を論じる研究を見ればよい (Lee et al, 2003; Harvey, 2000 も参照)。希望の現れは別なるものへ未来を切り開くのだが、こと今が「脱中心化され、散乱した、複数かつ部分的」(Gibson-Graham, 1996, p. 256) であることを思い起こさせる。

希望が重要であり、そしてそれゆえ希望に注目するはっきりした研究を押し広げるこの洞察を展開するために、私は音楽の消費と日常生活の情動的地理に関する二つの研究を用いる (Anderson, 2004a; 2004b; 2005)。希望が、そして希望に満ちていることがどのように現れるかという希望の地理に対する私の描写は、ほかの分野の感情の研究を補完することだろう (恐れについては Capital and Class (2003)、愛については Thien (2004)、退屈さについては Anderson (2004b) 自身については Koskela (2000)、不安については Davidson (2003))。これはシンプルな疑問から始まる。つまり身体はそれが希望に満ちるとき何をするができるのか、どのような適応力と能力が可能となるのか、である。これらの問題がもたらされるそのエソロジー的な枠組みは、「非表象理論」という名の下で行われてきた研究におけるスピノザの思想の再評価から出発し、近年現れている情動への同調をとおして、希望について考え抜くことをわれわれに要請する (Anderson, 2004a; Dewsbury, 2000; 2003; McCormack, 2002; 2003; Thrift, 2000; 2003a; 2004a; 2004b)。こうしたこと、そして関連するポスト構造主義的研究から、特に情動に関連する理論的語彙が現れている。それは「情動がわれわれの情報とイメージをベースとする後期資本主義的文化の理解にとって中心であるというメディア、文学、芸術理論における理性的感情の増大」(Massumi, 2002a, p.27; Connolly, 1999; 2002; Grossberg, 1992; 1997; Marks, 2000; O' Sullivan, 2001 とも比較すること) に反響している。しかし「情動」という語は今や、さまざまな研究で別様に用いられるやっかいな語となっている。Thrift (2004a, pp. 60-64) は近年パフォーマンスや Tomkins の心理学や、Delueze によるスピノザの倫理についての再評価や、新ダーウィニズムの考えを描き出している。われわれは、ポストラカン主義の心理学からもっと

もはっきりと情動の語彙を展開する思想の伝統を思いつくだが (Brennon, 2004)、にもかかわらず、概念的決定不可能性を回避している便利な定義上の課題があり、それが広い範囲での感情の地理に対する取り組みを可能にしている (Anderson and Smith, 2001)。それは、それぞれとの関わりの中で書き直していくのではなく、諸語彙の間の差異を無傷のままにしている。これが問題である。というのも、理性を越えたもの、あるいは理性以下のもの一情動だけでなく、雰囲気、情熱、感情、強度、理性的な感情一を描き出すために用いられるその語は、社会科学と人文学がそのトピックにさまざまな形で取り組む中で、しばしばそれぞれを変形しているからだ (Pugmire, 1998; Solomon, 1992)。

だから本稿で私は、情動のはっきりとした理論を概説し、希望と希望に満ちることの地理に関する研究を開くつもりである。次の章で私は情動 affect、理性的感情 feeling、感情 emotion を、循環、表出、能力の異質のプロセスから作られた三つの様式に区分する。しかし情動の、あるいはそのための言語は不可避免的にせめぎ合っている。第3章で私は、情動の過剰という考えについての問題を広げる。私は情動の研究が純粋な贈与物と類似した過剰の理解によって活気づいていることを論じ、他の過剰の形象によってこの平均化が補わなければならない、と強調する。そして私はこの二つの章で概説された情動の理論を、「未だ来ていない」ものの概念に組み込まれた過剰の多様な類型を統合する一つの説明を例証するために、いかに希望が現れるか描き出す。私は、身体が遭遇の縮減と情動の幅広い流れにおける分裂の両方をとおして形作られるとき希望に満ちたものになり (第四章)、また「すでにそうになっているもの」の地平における「外部」を感じたり開示したりする身体によって希望が演じられること (第五章) を論じていく。本稿全体を貫く含意、および理論的かつ経験的な研究が互いに関わっていく中で重要なのは、「情動の変調と情動の変調の出会い」(Massumi, 2002b, p.234) である希望に基づいた思想のポスト合理主義的な技法に関する議論である。最後に私は希望をとおして情動の概念を考えていく。それゆえ希望は本稿の対象であると同時に情動の理論としての模範となるであろう。

## 2 情動、理性的感情、感情

情動と感情のはっきりとした語彙は、理性以上あ

るいは理性以下のものを、個人の精神を持つ自己同一的な思慮深く内的に一貫している感情には還元することができない考えから始まっている。経験的な社会学、そして主流のあるいは構造主義的な社会心理学は、「生得」か「社会的構築物」かの間で感情を概念化してきた (Lupton, 1998; Williams, 2001 を参照)。「ここにある」主体と「あそこにある」客体という近代的な劃定作業により、それとは別の様相が「生物学的システム (伸張の側面) か認知的、言語的、社会的プロセス (思考の側面) のどちらか」(Brown and Stenner, 2001, p. 78) に還元されている。情動的なものや感情的なものを考え抜くことは、身体が刺激され (刺激をとおして)、刺激する (変形の結果として) 個人の限界を超えた収容能力としての情動へのもう一つの同調から始まる。これら二つの収容能力は「それらを経験する人びとの強さを越えて」いる。「情動はその正統性がそれ自身の中にあり、あらゆる生きられたものを上回る生成物なのである」(Deleuze and Guattari, 1994, p.164)。「刺激を受け、与えること」は「あなたが何かを刺激したとき同時に、あなたは刺激されることに自分自身を開いている」(Massumi, 2002b, p.164) というような、身体における同じくダイナミックな移行、あるいは変化の二つの特性なのである。

しかし日常死活的な生を成立させる、刺激し、刺激される収容能力は、ユークリッド的空間の「中」にあるいは単線の時間の「中に」存在する、人間とか非人間とかの性質から単純に現れるわけではない—つまり、情動は一つの主体とか身体とかはたまたまるで主体によって所有される客体というような記号の中に存在しない—(Ahmed, 2001)。ひとまとめにして考えると、それらは Deleuze (1978) が「われわれが次第に完成されているものへと至る持続」と結びついていく「持続的なバリエーションを持つある種の旋律」と名付けるものを構成するのである (Deleuze, 1988, p.49)。「刺激されること—刺激すること」は、転移のプロセス的論理から生じる。そうした転移は「それぞれの変化が収容能力の中のバリエーションによって成し遂げられること、すなわち刺激したりされたりする権力が次の出来事によって、きわめて簡単に記されうるある変化」(Massumi, 2002a, p.15) である、空間的かつ時間的に分配された遭遇において発生する。動物学からのそうした結びつきに対する共鳴は、スピノザによる無学の宣言に従っている。「われわれは身体が何をなするか、依然として知らない」(Thrift, 2003a)。ここで問題なのは、人間と非人間の多様な集合性の中で行われ

る、調和的あるいは非調和的關係性の構成なのであり、それが「浮き沈み、権力の持続的な偏差……増加と減少の記号、(喜び—悲しみといったタイプの) 一定方向を持ち、刺激、感覚、知覚のようなスカラーをもはや有しない」(Deleuze, 1998, p.139) ものを生産するということである。異なるタイプの關係性が持つ情動性は、空間・時間の生を熱心に強めたり消耗させたりする質的な差異の中で発見されうる。たとえば性的な愛情やロマンティックな愛情の空間では「あなたは恋人や友人といるときエネルギーを受ける。別の人といるとあなたは退屈したり疲れ切ったり、憂鬱になったりする」(Brennon, 2004, p.6)。別の例を挙げれば、ケアの親密な空間は、両親や子どもたちによって共有された共感から、無生物から生物を区分し、また生きていくという有機的なプロセスに巻き込まれた感情の状態における瞬間的な変化に応答するような、感情のダイナミックで動的な性質」(Stern, 1983, p.156) に至るまで、演じられる。

身体間の諸關係、そうした諸關係が巻き込まれる遭遇からの情動の出現は、つねにすでに刺激的な空間・時間の物質性を作っていく。第一に「出来事」があり、第二にそうした「出来事」の刺激的「効果」があるというわけではない。「とどまることなく振動する前景/後景、あるいは内在的な『平面』(すなわち、それ自身の構成要素すべての間にあるものである)」(Seigworth, 2000, p.232) としての主体—世界、あるいは内部—外部という区分の以前、そして以後に、情動は立ち現れるのである。情動が空間・時間を成立させる。しかし刺激を与えたり与えられたりするその潜在能力の運動を、主体—客体の存在論へと還元しようという傾向は、それを目撃することを困難にする。われわれは、ある客体の特性に対しての共有された刺激と、ある主体への注意を同じように割り当てている。Massumi (2002a, p. 219) の言葉で言えば、「情動の『拡張』が阻止されている。ある共有は機能化されてきたし、その残余は私的なものにとって都合の良い状況へと格下げされてきたのである」。情動をとおして思考するために、われわれは、主体あるいは客体という区分を離れ、情動がどのようにローカルを越えた運動の多様なプロセスを介した文脈の間におそらく存在するその道筋にあるのか、ということに関心を向ける必要がある。Massumi (2002a, p.217) は「情動は状況的である。すなわち文脈の中に入り込んでくるのである。しかも連続的にである。情動は超状況的なのである。それは文脈の前であると同時に後であり、

個人の前であり後であり、連続性の過剰はそれ自身の持続によってのみなされる」と強調する。情動の過剰な運動、それをわれわれは循環、フロー、伝染、感染といったプロセスをとおして考えることができるのだが、そうしたものは特殊な決定の自律的な出来事なのである。「それ自身の持続的な変化の中にあるある軌跡であり、あるいは線」(Seigworth, 2000, p. 230)なのである。ここには情動の顕れや運動についてのスケールの影響に対する先験的な前提がない(感情の瞬間的で小スケールのな地理、という共通の前提はあるが)。たとえば、興奮の転移が、それ自身のロジックでもって空間に存在する明確な実体としての群衆をどのように構成するか、考えてみればよい(Brennon, 2004)。あるいは恐怖の循環がどのように9・11以降のアメリカ国民の境界を作り出したか考えてみればよい(O Tuathail, 2003)。

重要なのは、情動と他の様態の違いを認識することである。それは、経験の空間・時間を上演したりそれを阻害したりするものとして現れたり特質づけられたりするものとして、情動の顕現と運動を説明する一すなわち、それはある出来事が多様な登記へと分岐することである。情動の運動は、同じように「理性的感情」と描写されている身体の背景的な習性や状態の中で、自己刺激に反応するような本能的な変化をとおして顕れる。「単純に言えば、私が怒りを感じる時、私は私をとおしてやってくる怒りの筋道を感じるのである」(Brennon, 2004, p. 5)。辱められた身体の恥じらい(Probyn, 2000a)、怒りを受けた身体のコア(Katz, 1999)、退屈さを感じる身体の不安心な本能的な緊張感(Anderson, 2004b)などが例となろうか。そうした背景的な身体の理性的感情は、「感情の間に広く行き渡った身体の状態」に対応しているものであり、「背景的な理性的感情は、感情によって揺るがされることのない身体の風景に対するわれわれのイメージなのである」(Damasio, 1994, p. 50-151)。「身体」の理性的感情の状態が持つ二次的なイメージを形成することは、「その様式、その様式の習性、その上にある様式の影響力に対して生じるもの」の表現であり、「それゆえそうした刺激は、まずもってイメージであり有形的な痕跡なのである」(Deleuze, 1988, p.48)。理性的感情は、いつも刺激する身体の現前を含意する。すなわち、ある刺激は、身体の上での顕れや運動の遂語的な衝突なのである(その身体が何ものかでありうる時)。しかし、情動の運動は、空間、あるいは時間の「内側」における空っぽの身体によ

て単純に受け取られるのではない。理性的感情は情動の瞬間的な評価であり、それは刺激される状態にある刺激を受けた身体に依拠する。

情動の顕現と運動、そして身体的な理性的感情における物的な発現は、経験の空間・時間に生命を吹き込んだり弱めたりする生命の超個人的な意味を作り上げる。これは、多様な現前と不在の中に空間的にも時間的にも配分されるし、そこへと伸びていくものだ。しかし、情動的なものはまた、存在の瞬間的で明確な個人的方法によって経験されるようになっている。そうした方法は、回顧的に感情と名付けられるのである。特性の多様なプロセスは、情動の、そしてはっきりとした主体性やアイデンティティの運動を多様化させていく(Lupton, 1998)。それゆえ「感情は主体的な内容物であり、そのような地点から後には、個人的なものとして定義されるある経験の特質の社会言語的な固定なのである」

(Massumi, 2002a, p.28)。感情は情動の制限をとおして「意味論的に、記号論的に形成された連鎖、物語ることが可能な行為—反応、機能と意味」(P. 28)を形成する。感情における情動の制限を、摩擦的—Massumiの言語では捕獲とか閉塞—なプロセスとしてのみ前提することは危険なのだが、また空間・時間を作り上げる感情の役割も軽視されている(感情の地理学に関する近年の研究(Social and Cultural Geography 2004)を参照)。代わりに、より拡張的な一連の関係性へと折りたたまれていく、制限としての感情は、隠喩的・反応的な連合作用の繊細な舞踏法において演じられる、行為の中の物的な知性の技巧的な様式と描写されるのである。

### 3 過剰と情動

情動の空間化と時間化はその関係性の中で生じるという前提、そして情動の運動が経験の空間・時間を構築する発現と制限のプロセスに沿って生じるという前提は、感情のカテゴリーを広げないようにするものである。それでは非理性的なあらゆるものの明示されない指標にしかならない。ここでは二つの結びつけられた警告が重要である。第一に、三つの様態の関係性は、情動から理性的感情をとおして感情にいくような運動ではない—つまりそれは先験的な方向性や因果性を持たない。ここまででほめかされているプロセス(運動、発現、制限)によって、その三つの様式は、こざっぱりした分析の方

向性を妨害しようと、互に行ったり来たりしている。多様なフィードフォワードとフィードバックの円環が、そうした混淆物を「刺激的に染みこむ思考」と「強度を持つ思考」(Connolly, 2002)として作り上げるために現れる。第二に、こうしたプロセスは非単線的であるという前提に従うと、その区分は決定不可能で、非媒介的で、自然なものと、明確で媒介可能な社会的なものとの間で行われる自然—文化の区分と一致しない。情動の語りはしばしば、「未分化な経験的豊富さの反省以前でロマン的な生の領域」(Massumi, 2002a, p.29)と解釈されている。たとえば、Ahmed (2004a, p. 39) は諸様態を区分することは、情動と瞬間的な物体的感覚を同じと見なす危険があり、それゆえ「意識的な認識と『直接的な』理性的感情の間の区分」を作り出し「そうした区分が自覚されずに経験されるものが過去の経験によって媒介されうることを否定する」と論じる。言説的に構築された、直感的な喚起の区分が生じていない領域に暗に基づく社会構築主義者の説明とは異なり (Sedgwick and Frank, 1995)、多様なプロセスと様態についてのスピノザ主義的説明は、瞬間的で媒介されている連続体の中にあり区分不可能だとする。それぞれの様態は完全に関係的である。つまりそれは、空間と時間の「内側」で存在する個人的身体において決して自己抑制されない、あるいは完全に自己現前的な、異なるタイプの関係性の持続的決定なのである。

情動は理性的感情あるいは感情において、その発現、あるいは制限を上回っているという特殊な概念化は、しかし、「日常生活」の別の形象に対する理論的・概念的生産を可能にしてきた。複雑な身体が形成される特殊な遭遇から出発すること—空間化と時間化の決定不可能な運動をつないでいくプロセス—は、現実となるものへと折り畳まれる仮想性の現前と情動とを結びつけている。つまり、存在の存在としての実質的なものが、「現実的な行為における現実化のそれ自身のラインを創りあげる」(Deleuze, 1991, p.97)。それゆえ、三つの様態の重要な区分は、媒介・非媒介というものではない。そうではなくそれは、感情と理性的感情が現実化をとおして生産され、可能的な情動の発現の統一性へと決して落ち着かないのである。情動の運動は、つねにある現実付随している。しかし、それは現実的になるものの中での差異やら多様性を生み出す実質的な一連の傾向や潜伏なのである。情動 = 仮想性 = 過剰という等式は、別の情動の活発な創造活動をとおしてのみある情動が変化する、というスピノ

ザ主義的な要点に従いながら、ポスト批評的な技法をある実験へと導いてきた。収容能力のその倫理的育成は、可視的な振る舞いを変化させ (Brennon, 2004; McCormic, 2003; Thrift, 2003b)、またそのような帰属に対する傾向の実践が「良い遭遇」を上演することにより、新たな可能性が創りあげられていく (Massumi, 2002a; Thrift, 2004a)。寛大さ (Diprose, 2002) あるいは魅力 (Bennett, 2001) を生産するために倫理的技法を展開するこうした情動の変調の様式は、「あらゆる明確な発現を溢れさせる活発さの質的過剰」(Massumi, 2002a, p.253)と同調する何か「日常生活」の中で多様な形で現前しており、情動をとおしてわれわれはそれらに面することが可能になる、と前提している。政治的なものの拡張、そして政治的实践は、情動が「それ以上の何か、それ以上になるもの」(Massumi, 2002b, p.215)として現れることを理解することによって下支えされるのであり、それは「現実的なものの中へとそれが流れ込むような、実際的なものへの」(2002a, p. 43)に注目することを可能にするのである。

しかし、情動の語彙の出現を活気づける過剰と変化の結びつきは、特別なものでない。「日常生活の生」と同調せよという要求として、何度も生じているのである。平凡から並外れて出現する領域としての日常生活に関わろうとする別の政治的实践にとって、それはずっと不可欠なものである。たとえば、シュルレアリストやシチュアシオニストらとともに「日常生活のミニチュア、……身振りや象徴の多義性の中に、味わう価値のある平凡なもの」(Gardiner, 2000, pp.1-16)を発見していった。また、「日常生活」と「還元不可能な残余」(Roberts, 1999)の観念を同じものとする中で、変化も生じてきた。Seigworth (2000, p.257) はド・セルトーやルフェーブルを引用しながら、「日常生活」の「活力」がつねに閉鎖性を乗り越え、つねに「より以上」の横断線を造り出すことを示すことで、この軌跡をもっともはっきりと展開してきた。つまり、純粋なプロセスの過剰は、「生き生きとした過剰、つねなる過剰」という前提から出発するのである (Amin and Thrift, 2002 を参照)。もし日常生活の政治学が持つ別の分節化との親密性が認められるなら、過剰の観念もまた、人間を越えたもの (Whatmore, 2002) をめぐる近年の思想と、非合理的な群衆の階級化されたイメージ、あるいはヒステリー的な女性というジェンダー化された形象における感情の否定的な評価 (Brennon, 2004) を折り畳んでいく、

複雑で長い系譜学を持っていると言えるだろう。それゆえ、過剰のその考え方が、情動と実際的なものとを等しく扱うことからどのように展開するのか。「プロセス的な過剰」の一領域として情動的なものを考えなければならないということ想起させ、また再発明することの諸効果をとおして思考するためにも、これを明確にすることが重要なのだ。

情動の仮想性を思考することは、差異の根本的な主張を基礎づける過剰に注意する果てしない条件とのある類似性を代役している。「権力への意志、差延、大文字の欠如、(非)存在、あるいは不可思議な存在、器官なき身体、『語りえぬもの』、争異、女性的なもの」(Widder, 2000, p.117)を含む。Deleuzeに付き従うその研究は、しかしながら、実際的なものと情動との間の結びつきをめぐって、現在、内部で分裂している(DeLanda (2002)とAnsell Pearson (1999)を比較すること)。地理学における情動の研究は、実際的なものの拠り所なき基盤から現れる情動について説明するMassumi (2002a; 2002b; 2002c)にもっともはっきりと依拠している(McCormack, 2003; Thrift, 2004a)。Massumiにとって情動の過剰は、無条件の逃避の純粋な傾向である。その傾向には、コンテキストの間の運動の瞬間に、起点も目的地もないのである。この噴出する運動が「生命」の定義にとって重要である。

もし、逃避も過剰も残余も、フェードアウトもなければ、世界は可能的な死も純粋なエントロピーもないことになる。実際に存在しており、構造化されている事物は、それらを回避するものの中で、そしてそれをおして生きている。その自律性は情動の自律性である(Massumi, 2002a, p.35)。

Massumiは、情動の「より以上」のものは、つねにそれが「持続」しながら「逃避」という進路を構成すると強調している。「逃避」という語に加えて、「余剰」と「過剰」という語も、持続的な「より以上」の文脈の外側へと広がる運動の現前を閉じ込めるために用いられる。情動の逃避、あるいは氾濫を考えることは、ドゥルーズによる発生の強調に叶っている。発生とは、「引き離された単一性」(Widder, 2000, p.127)を実際のなものが現実化するときに、前方へと向かっていく運動をおして現れる。このことは、情動の発現と制限が「捕獲」と「閉鎖」の摩擦的なプロセスであるという前提へと向かっていくのである。

情動は、それが相互作用のための活力や可能性を持つ特別な身体の中で、ある制限を開放するという程度にまで自律的である。現実的な結びつきや閉塞の機能を満たしながら形成され、制限を受け、状況づけられた認知や知覚は、情動の獲得と閉鎖である(Massumi, 2002a, p.35)

情動の氾濫や残余は、あらゆる状況の刺激的な背景・前景において現れる純粋な差異の肯定に対して開放されている。Massumi (2002a, p.217)は、情動の横断的な特質を強調する。それは「状況的である。すなわち文脈にとって重大な始動なのである。まさにそうなのだ。情動は超状態的である」。現実になるものへと折り畳まれたものは、つねに、特殊な決定の外側に存在する新たなものの質的な残余である。「重大な可能性の残余は、そのあらゆる特別な発現によって消耗され続けている」(p. 248)。それゆえ、噴出する情動の氾濫が「現実に存在する」ものを「引き裂き」あるいは「妨害する」ことを可能にするのだ。

Massumiが概述するように、情動の逃避と侵入(あるいは噴出と分裂)は、純粋な贈与物という間接的なモデルによりながら生じる。つまり、(理性的感情あるいは感情における)情動の発現と制限は情動の統一性と決して一致せず、さらに受け手も送り手も与えていたり、受け取っていたりしていることを自覚していないために、無名の非個人的な可能性の贈与が生じるのである。情動は、王手をかけられているものの、現実になっているものの中で依然として遂行されている、そうした仮想性の爆発性に対する視点を提供する。それゆえ、生命は「他の奇妙な可能性のまだ見ぬ可能性」(Rajchman, 1988 cited in O'Sullivan, 2001, p.133)を与えられるのである。純粋な贈与の観念を述べるCaille (2001)が言うところの「想像不可能性」をおして、情動の運動は命を与えるのである。つまり、身体に対して一方的な「自由」の感覚を与えるのである。それゆえ、情動の過剰の制限について書きながら、Massumi (2002a, p.36)は「情動の逃避の持続性が記されると、肯定的な意味を帯び始める。というのもそれは、自分自身の活力、活動性、変形可能性(しばしば「自由」として意味される)の認識以上のものだからだ」と言う。彼はそれが恥、嫌悪、それ以外の名付けられた感情ではなく、自信であり、そして情動の過剰の贈与に影響を与えることを強調する。「捕まえることが可能な生命の可能性として

の情動の感情的翻訳。それは活力性の片方の意味だけの自覚であり、また特定の感情的発現なのである」(p. 41)。

存在の過剰を純粋な贈与物と考えることで、超ローカルのプロセスとして情動の運動に注意することができる。そうした超ローカルのプロセスは、「われわれが生活を移動するときに付随する刺激や刺激を受けるという可能的な方法の」、実質的ではあるが現実的ではない「個体群あるいは群衆」

(Massumi, 2002b, p. 214) を作ることで、空間・時間の中に差異の可能性を与えるのである。仮想と現実の観念をめぐる情動と過剰の間の存在論的平均化は、結果的には、これまで述べてきたポスト合理主義的な政治実践を保証するための先験的な基盤や地平として機能してきた (Spinks, 2001)。情動に関する新たな研究は、情動と侵入・発生の贈与の間のこの平均化を用いることで、情動の運動や制限がどのように生の多様化と密接に関わっているのか注目してきた (Dewsbury, 2000; 2003; Latham, 2003; McCormack, 2003; Thrift, 2003a)。そして、「より以上」になり続けているものの現前によって鼓舞される完全さの領域として、空間・時間はより幅広く分節化されるようになってきているのである (Thrift, 2004b)。Latham (2003, p.1902) は、パフォーマンスに関する特別号への導入論文において、そして出来事性の議論の文脈の中で Massumi に依拠しながら、この信条の行為を次のように要約する。「われわれは現実的なものがつねに可能性に、その出現へと侵入する仮想性につきまといわれるような世界に住んでいる」。

もしわれわれが、情動への注視が必然的に「より生命へ」と向かうことを閉じてしまうと前提すれば、困苦や惨状といった形を作り出す関係性の様式は、社会的そして文化的なものの肯定的な説明に賛成しながら、非生命の形式が生命を横切っていくことを消し去ってしまうという危険性をはらむ。たとえば、日常生活を横断する困苦の多様な形について考えてみればよい。Connolly (1999, p.47、協調は原文) の言葉では、困苦するとは、「耐え忍ぶことであり、別の有害な何かに服従することであり、脱有機化されることである。苦しむことは行為能力、熟達、全体性、喜び、快適さの裏面にある」。私が強調したいのは、困苦することの遍在性とは、政治的なものの定義、そして政治的であることの領域の定義が拡大して情動へと入って来ないようにすることではないということだ。むしろ、「文化的に誘発された困苦から抜け出る新たな道筋を切り開く」

(Connolly, 1999, p.51) ことができる生成の政治学を育成するために、肯定的な形而上学を作り上げるものがある必然性をつき動かしたり鼓舞したりするのである。なぜなら、困苦へ応答する義務の受容は単純に生じるのではなく、「それに先立つ世界に対する変幻自在な配慮から生じる」Connolly (1999, p.57) からである。減退したり破壊したりする情動の発現や制限はそれゆえ、情動に関する研究に共鳴し始めている (暴力と都市についての Thrift (2004a) を参照)。しかしそれは、情動の研究が、われわれに情動的、感情的な生活の多様性を閉鎖することを可能にするような過剰の他の形象によって代補されえないということを意味している。まさに、不確かだが希望に満ちた倫理の中での純粋な贈与と情動の平均化に対する代替物のぼんやりとした意味がそこには存在しているのであり、そうした倫理は近年の情動のしっかりとした質的研究を活気づけているのである。McCormack (2003) は有名な例を示しながら、ダンスのセラピーにおける身体化された実践への創造的介入がどのように刺激したりされたりする多様な可能性を助長するのか描き出す。世界に対する寛大さの肯定的なエトスを経た、何かよりよいものの創造が暫定的で、気乗りのしないプロセスであることを、参与観察の実践をおして示すことで、彼は出来事に満ちた世界の不確かさをほめかしている。

この気乗りしないことの間、情動が要求する保証的思考の欠如は、より問題な理論的言明、すなわち現実的なものは必然的に可能性あるいは潜在性に取り憑かれているということと対照的である。このエトスを展開し、また過剰と純粋な贈与の平均化を代替するために、別の情動の過剰についての説明が、日常生活の情動性に関するフェミニズム的研究とマルクス主義的研究から引き出されている。Probyn (2000a, pp. 139-141) は、プライドの運動における恥の伝達が、「身体とは何で何を行うのかについての高調する認識」へと変化する身体間の「距離化の前後運動」を、どのように作り出すのか説明する。恥を感じるそうした身体は、侵入された近接性を人は持つという認識によって徴づけられ、それゆえ「その境界についての純粋な感覚を失う。それはそれ自身の行為によって泥をはねかけられ、汚されるのだ」(p. 140)。身体を関心と義務のヒエラルキーへと分配する敵対や競合の破壊的な関係から、ここでのある特徴的な情動の運動が生じている。この運動において情動は過剰になり、身体に刺激されたりされたりする別の取容能力を与えのだが、しか

し、それは固有のものの指標の外側として周縁化され、そして機能的なものの文脈においては不要となるものなのである（分離の嫌悪感と種別については Ahmed (2004b) を参照のこと）。この例では、恥の出現と運動によって、われわれは多様な過剰のタイプを考慮しなければならない。強度における差異は異なるタイプの関係性から形成されるのだということの思い起こすために、剰余・残余という対句を乗り越えていかねばならない。われわれがこの研究を労働力の別のタイプの刺激に関するマルクス主義的研究で補うと、次のことが分かる。つまり、情動の運動は別のタイプの過剰によって生じるだけではない、情動は衰退したり破壊したりする関係性へと展開することから分かるように、そうした剰余としての過剰の出現と制限は多様である、ということである。家族内での感情的労働という種別や、あるいは非熟練工という種別のような、身体的労働の別の種別が見せるパフォーマンスでは、ある剰余が「可能性の曖昧な意味」(Massumi, 2002b, p.214) を自動的に開け放つわけではない。そうではなく、剰余としての過剰の創造が、多様な不幸の形式を作り上げる爆発的かつ/あるいは抑圧的な関係において限定されるのである (Fraad, 2000)。

#### 4 希望の生成

情動の運動および、制限・発現という二つの例はそれぞれ、噴出・進入という、そして情動の純粋な贈与の摩擦的ではあるものの活性化する発現・制限としての過剰という Massumi の概念化とは別の方法で問いかける。それは過剰の別の分節化を実験する必要性を強調する。つまり身体間の義務のネットワークとつねにすでに結びついたものとして情動の贈与を考慮しなければならなくなる。豊富さの前提が問われる。われわれは、情動が関係性から現れる開かれたシステムであるという前提、そして経験の空間・時間における情動の発現と制限が情動的な発現の全体性を不毛にするという前提を維持するとしても、情動の運動と存在の「過剰」との正確な関係について、やはり開き続いてなければならぬ。しかし問題は、それ自体が過剰を喚起していることではない。過剰の観念それ自体が、安定したシニフィアンとしては機能しえないということである。なぜなら、その観念は世界の肯定の中であらゆる制限を溢れさせるからだ。たとえば生命を補うと同時に減退させる過剰の種別に照準する Bataille

(1985) の豊富さを見れば良い (エロティシズム、戦争、犠牲、放蕩、祝祭性、破壊)。

情動の過剰に対して開かれ続けているもう一つの別の説明へと向かう一つの軌跡を例示するために、私は特定の遭遇から出現する関係性の種別として、ここからは希望を扱っていきたい。希望が現れ、それゆえ空間・時間を作り上げる方法は、音楽の使用についての二つの短い事例研究をとおして考察される。絶望という文脈で音楽を聴くスティーヴと、苦悩という文脈で音楽を聴くエマの研究である。二つの事例は 17 世帯を対象にした幅広い音楽と日常生活の調査からもたらされたもので、参与観察、繰り返し行われた個人的あるいはグループの面談、一緒に音楽を聴いたり日記を書いたりする作業という、一連の方法論で行われた。それによりどのように音楽が情動、理性的感情、感情の家庭内の地理との関係性の中で機能するのか調べようとした (Anderson, 2004a; 2004b)。二つの事例をとおして私が注目するのは、刺激したりされたりする収容能力における変化をとおして日常生活のルーティンとリズムと音楽の物質性がどのように結びつくのかである。同時に希望に関するより広い研究を開始するために、希望の出現に関する別の事例によって音楽に関する研究からの実験可能な素材も用いたい。希望の地理への取り組みを下支えするのは、二章で概述した区分に従った相互に結びついた、次に示す三つの研究課題である。第一に、希望のフローは身体間を移動する超個人的な刺激として現れる。第二に、理性的感情が情動の発現からあらわれるという、特殊な身体的背景の布置としての希望である。第三に、現実的な希望は制限のプロセスをとおして現れるのであり、また一定の客体を所持することによって区分される。それぞれは、希望とは未来に向かって方向付けられた計画的な行為であるという共通の前提を更新するのであり、そこでは希望されるものの内容だけが「社会的に構築される」(Nunn, 1996; Waterworth, 2003)。

われわれが希望と呼ぶ別の関係性を考えるとき、前章で検討した情動の過剰についても考えなければならなくなる。希望の現前はまだまだやって来るもの、生活の過剰な氾濫を先触れするものと長く考えられてきた。それは不在・現前の一神教的あるいは非・神論的地平との強化された結びつきへと身体を駆り立てる。というのも希望の存在と生成は「推定される可能性のラディカルな拒絶」を体現するからである (Marcel, 1965, p.86) (Marcel, 1967; Pieper, 1994 も参照のこと)。しかし調査が始まる



と、ある希望の出現への緩やかな注視が、あるアポリアから現れた。希望に満ちた身体は不可避免的に「それ自体の中で不確実な形で敗北の状況にあり続けている」(Bloch, 1998, p. 341) のである。希望は「日常生活のはかない、移ろいやすい、非有形の、非有機的な特質」(Seigworth 2000, p. 257) を弱める不幸の多様な形の現れの中からのみ発生する消点であった。これら二つの事例の議論をとおして、私は希望の出現が、不確かさ、危険に基づいた過剰の形状を付け加えることを例証してみたい。そうしたことは Blochian (1986) が「未だ来たらぬもの」と呼んだ形象に埋め込まれることであろう。

それは、喜びと悲しみ、強化と縮小というベクトルの間にある危険であり、私は二つの事例の議論をとおしてそれに迫ってみたい。最初の事例は 29 歳、独身のスティーヴである。彼はある工場で二年間勤めていたが、工場が居住地域から移転したために職を失っていた。われわれは失業という文脈における彼の絶望について話した。

スティーヴ：…ただ何というか退屈で孤独で…全部が全部ここで終わったというか…今は何もしていないし。

ベン：…ああ

スティーヴ：…ときどき他のことをする元気がなくなって、…ここでじっと座って…ずっと座って世界が変わっていくのを見ているというか、この辺が板張りの家ばかりになっていくのに苛立って…まあ、外に出て行ってもどのみち同じなんだけど。

われわれはしばらく話し合っ、インタビューの途中に音楽と一緒に聴いた。彼は希望の話し合いの文脈の中でレイディオヘッドのアルバムを聴いていた。

スティーヴ：…このアルバムを朝とか失敗したときに聴く。…分かるかな、落ち込んだときにこの曲が元気づけてくれるというか、もうちょっとだけ希望が湧いてくる。これが憂鬱なのかどうか分からないけど…でもこれってマジできれいというか…それで感情がわき上がってきて…それと同時に泣く気がなくなって、で、君もときどき必要になるんだろうけど、…おれは…これが助けてくれるから…落ち込んだときには、…寝転がって…これをかけるんだ

ベン：これと同じ感じの歌って他にあるの？

スティーヴ：スマッシング・パンプキンのマヨネーズって歌。これはマヨネーズってふざけた名前だけど(笑) きれいな曲なんだ。…マヨネーズっていう

悲しい歌…あんたはどうなの？こんな曲あんの？

ベン：分かんないな…レイディオヘッド・クリープはいつも聴いてたけど

スティーヴ：レイディオヘッドはいいよね。MUCH はもっといい。…自己嫌悪的というか、うーん、俺はいつも同じことを感じている誰かを見つけるのが癒されるっていうか。それってすごいだろ。俺はこのアルバムを、落ち込んでたから昨日の朝に聴いたんだ…助かったよ。だっておれはトム・ヨークよりはましだって分かったし、彼も同じ気持ちってのも分かったし…ちょっと元気が出た。

最後の言葉まで、希望が手がかりとしてある。われわれの会話の中を出たり入ったりして漂っているのはかない現在、それがときに会話を作り出す。その代わり身体的な刺激(退屈、孤独、元気のなさ)をとおして現れる一連の縮小が見られる。スティーヴは刺激したりされたりする収容能力における変化を介したトランスナショナルな資本の移動と彼との結びつきとして、解雇の不正義を示している。ここではほめかされるのは、希望のなさや失望のフローを示す一連の特殊な衰退であり、それはしばしば解雇によって位置づけられ続けている。経済的変化の後に窓の外を見やったり、近隣地区を歩いて廻ったりするという単純な行為を特徴付けるフラストレーションを、身を切るようにして生み出しているのであり、それは彼の身体が「独立して漂う刺激的な力の理性的感情」(Katz, 1999, p. 309) をさらけ出すために構成されていることを意味する。スティーヴの情緒不安との明白な関係は情動の活力を支配しており、また彼を取り巻く世界との関係性を管理する規範として作用するようになっていく。だからわれわれは、希望の別の実践における分岐の最初のポイントから出発しなければならない。つまり希望に対する威圧を呼び起こす多様な減退であるのだが、それはまたその差異においては、希望の必要性も、希望に満ちていることや希望の別の種別を作り上げる収容能力も、最終的には配分されないということを示している(Hage, 2003)。スティーヴの例は、より幅広い困苦の情動的地理を印づける希望の不平等な配分に反響しているのだが、それと同じというわけでもない。もっと強力な例を挙げるなら、Lasch (1991, p. 81) は深刻な苦しみにもかかわらず、アメリカ南部での奴隷制時代には解放への希望が根強くあったことを示している。奴隷制を結びついた不正義の特殊な感情状態という文脈では、希望は「正義における信仰、すなわち邪悪な奴らはいずれ苦しみ、誤りは正されるという確信」という対抗的なも

のとして存在していた（メキシコにおけるサパチスタと希望については Kumar (2000)）。

それゆえ、希望の生成へと展開することの危険性がここには存在する。それは存在の良いあり方が「依然として生じていない」ことを示すからである。つまり、その意味では、現在はそれを乗り越える何か良いものは未だ生じておらず、また「希望することを可能にする条件は失望を可能にするものとまったく同じである」（Marcel, 1965, p. 101）という事実から目を離すことができないからだ。それは希望が現れる特殊な衰退の文脈からつねに生じており、それゆえ、おそらく希望することがその実在するものを置き去りにするという意味があり、また希望のいくつかの種別が、われわれがそれらと結びついているのに衰退していくという関係性を継続するために、返ってくるという事実がある（Potamianou, 1997 を参照）。スティーヴが会話の最後に示した変化は、希望の生成が一瞬に別のよりよい方向へと向かっていくという、もう一つ別の例を示している（別の変化については Terkel, 2004 を参照）。それは情動の運動の発現と関係しており、それは失望をなめらかにしたり、何かもっとまじな情動の発露を誘発したりする（「同じことを感じている誰かを見つける」）という、音楽の物質性の可能性をとおして、一連の理性的感情（「元気づける」、「ちょっとは元気が出る」といった）へと対抗している。レイディオヘッドの歌詞や音程は、別のものの悲劇の移入によって瞬間的に絶望の循環を妨げるべく、物体性を結びつけることへとその後展開していく（「これが憂鬱なのかどうかわからないけど…でもこれってマジできれいとか…それで感情がわき上がってきて」）。

スティーヴと音楽、そして彼とその環境の間での希望の伝染の誘発は、自己刺激に感応するそして直感的な感覚のある刷新された生气の中で感じられる、希望の物的な配置である（特定の希望の明確な内容というわけではない）。これは、繰り返される背景的な理性的感情であり、それが経験の希望に満ちた場を形成する存在の良いあり方を上演する。Hage (2003) は希望の感情の他に立ち現れる背景的な理性的感情の特定の布置を示すために、「力能の希望」という言葉を作り出す。Hage はある種の希望は Spinoza (1910) の存在における存続に対する有限の様式の探求の描写において見られるような、生へのある種の意志と類似していると言う。スピノザにとって、「力能」はある事物の所有物、あるいは本質ではなく、有限の身体が発生のプロセス

を何度も繰り返すことを可能にする結びつきと離脱の特殊な方法なのである。Gatens and Lloyd (1999, p. 27) は、身体がどのように増大したり減退したりする超個人的な力のラインをとおして形成されるのか考えるために、力能の考えを引用する。

現実において有形の個人である身体と精神は存在において存続するために戦っている。われわれの身体は外的な力によって受動的に動かされるだけではない。それらは自分自身の推進力を持っている—自分自身の存在のための特殊な力を。しかしこのことは、個人が自分自身の力だけを行使しているというだけでもない。というのも実在しようとする個人なるものは、われわれが見てきたように、さまざまな方法で行為し行為されているからだ。個人の身体が複雑であれば、それが別の事物を刺激したりそれによって刺激されたりする方法もたくさんあるということである。

この身体の取容能力と可能性についての関係的な説明を考えると、希望の種別は個人に「多様な方法で刺激したりされたりする」（p. 27）ことを可能にする良い関係性の持続として特徴付けられる。だから希望に満ちていることは、その中で身体が継続することを可能にする行為を行うためには欠かせないものを提供するある配置を例証する。情動の移り変わりにおける積極的な変化として、それは可能性の刷新された理性的感情に対して、それが発生した空間・時間を開放する。これが情動の身体への変化であり、それは「希望の空間」を作るために間主体的な移動のプロ背宇にある人びとの間を移動していく。こうしたことを考えれば、希望に満ちた理性的感情は、終わりなき傾向の一部として生きたり試みたりすることを切望することによって特徴付けられるのであり、それは Bloch (1986) が超個人的な「希望することの希望」と名付けたものの一つの効果として設定され続けている。スティーヴの例では「ちょっと元気が出る」ことをそれは可能にしている。だからそれは希望の効果であり、別の希望の空間・時間を作る差異化の第二のポイントなのである。希望が困苦の別の形式の文脈において身体を元気づけるために登場するとき、希望に満ちたことの別の配置の効果が生み出されることを、われわれは見るのできるのである。

## 5 信用と「外部」

強調すべきこととして、それぞれ異なる減退のモメントから現れ、別の経験の空間・時間を作り上げる希望の多様に相互作用する配置が存在する。これは、希望がまったく異なる空間・時間（政治的闘争、病気などなど）から喚起され、またそれを生成するという別の事例を追うことによりほのめかされてきた。それゆえ、希望は日常生活との関係において矛盾する場を持っている。その覚醒は開いていること、そして迎え入れることのある種の情動的な威圧を提供し、よき未来が、経験の空間・時間が情動の運動と制限から現れる中から呼び起こされるのである。希望の一部をなすその不在、あるいは絶望は、個人的な所有物であるばかりでなく、絶望の出現、運動、発現、制限が個人を作り出すことを問いかける。しかし希望の配置というその後の生産は、矛盾したことに、弱められるそうした関係性をまとめていく良い傾向と潜伏を可能にするある不連続性から始められる。だから、希望の生成はどこか良い場所とか良い時に味方する超越の単純な行為によってではなく、ある現在の空間・時間の中の偶有性のポイントを押し広げる新たな関係性を作り上げようという行為によって印づけられるのである。

第二の事例をとおしてこの偶有性のポイントを考えてみよう。エマは33歳。結婚し二人の子どもをもうけている。われわれがエマと出会い話をしたとき、彼女は生物学的父親を捜しているところだった。二回目のインタビューの二日前、彼女は父親が一年前に亡くなったことを知らされた。彼女は、彼女を養子として引き取った両親の家に、彼女の息子をつれてやって来て、われわれはこの出来事の影響について話し合った。

エマ：落ち込んでいるとき、何というかある種の単調さとか、…元気がないとか、…はっきりとした理性的感情を感じないとかそう感じる。それで、…うーん…だから…それで音楽は何か重要なもの。…それはいつも…そう私をすっきりさせてくれるの、そう（ベン：そう）それで今週は…そうした機会がなかった…しんどかったから（ベン：そうか）…それでときどきそれでなんか現状打破というか…まあなんというか…月曜日の8時半にNoelを私のママとパパのところに連れ来て、彼は私を困らせたの…彼は元気な音楽をかけては私を日曜日からずっと困らせてたわ、うーん…私は耐えられなくて、げんなりして…だから私はいつものテープをかけたの…Donna SummerのGina GとHot Stuff知っている？…私完全にぼんやりしてた。私はNoelに聴かせたの。そしたら彼、曲に合わせて踊り出してすごかったんだけど、それを見てたら…悲しくなって…だって、私

はそんな気分にとってもなれなかったし…なんか巨大なガラスの壁、それか…ガラスの…ガラスの耳があるような感じで…だから彼にまったく合わせられなかったの…まるで…死んでみたいいな感じで…合わせられなかったの…とにかく家に帰って…チャンネル回してソウルを聴いたの、それも何の歌か知らない…知らないなんかの歌…確かに古いやつ。…そしたら元気が出てきて…いける音楽…もう気分よくなっちゃって…それでも気分が良くなったの…だって、私、Hot Stuffがかかっている時なんか、Noelを降ろして涙ぼろぼろ流したりしてたのに…だけど…それで友達のことを思い出して、踊ったりしたことも、家のことも、私のもう一つの家族のことも思い出して…だから…分かる？私、いつもそんな風じゃないんだけど。

この事例、そしてスティーヴの事例でも、他の傾向や潜伏の新たな理性的感情が、空間・時間の意味を変化するために帰って行くような、広範な情動の流れのパターンの中で、差異の開放や混乱から立ち現れている。エマはスティーヴと似たような理性的感情や感情の中での変化を描いている。彼女が言う希望は、自動車を悲嘆が循環する場としながら、彼女の子どもと生物学的父親との関係から発生する、弱体化のあるポイントをめぐる開かれている。彼女の生物学的父親の死という出来事において伝染した悲嘆、そして鬱的な単調さは、彼女の息子との関係性の瞬間的な邪魔と絡まっており、彼女は、息子の日々の情動的波動の文脈に同調することが困難だと感じている。音楽はこの弱体化を誘発し、増大させており、それによって一連の明確な理性的感情の登場によって世界との関係性を枠づけている（「それを見てたら…悲しくなって…だって、私はそんな気分にとってもなれなかったし…、Noelを降ろして涙ぼろぼろ流したりしてたのに…」）。その後、家に帰ると、ソウルが悲嘆の感染を遮りながら、希望の布置を喚起して、さらに増強していく。エマは過去の一連の出来事の強度を思い起こすことで、現れようとしているある空間と時間を思い返す。音楽の物質性が、彼女の家を情動的な過去と接触させながら、未だ来たらぬ希望の源泉を喚起する（「それで友達のことを思い出して、踊ったりしたことも、家のことも、私のもう一つの家族のことも思い出して」）。

希望の別の空間・時間を作る三つ目の分岐点は、ある闘が人生との強化された結びつきの創造によって横切られる、非連続性の瞬間である（希望の「ぼんやりとした光」あるいは「火花」）。そうした弱体化が依然としてほのめかす潜在的な弱体化の文脈

から、身体が「明白なりアリティの感覚」(James, 1982) に対して新たに開かれていることを可能にするために、何かが起こる。Benjamin (1969) は「歴史の火花」というアレゴリーにおいて変化の瞬間の活発化する意味をわれわれに提示する。それは「今というとき」の爆発的な混乱において過去と未来を一緒にする力を持つ。ここでは希望は個人的構成員の行為に依るのではなく、「ある外側の進入の下側で支えられている」(Deleuze, 1988b, p. 87)。ここには超個人的な再度の始まりがある。それは失望と悲嘆の伝染に対する応答の中で、現在を生き返らせる。それゆえ、希望を語ることは、未だ来たらぬ「変化の種、その瞬間には作動していないし明らかでもないような創作の中の結びつき」(Massumi, 2002b, p.221) について語ることである。希望の開放の情動性、つねに思考を驚かせる運動は、希望が喜びに満ちた情熱の不在を示すという議論の中では無視されたり、幻想と考えられたりしていた(Nietzsche, 1986)。しかし希望の倫理を評価する世俗の著述家によって希望の神秘と長く予兆されてきたのは、この運動が登記するその進入である。たとえば、Lingis (2002) はそれを、過去を忘れるという行為との関係において語る。Lingis (2002, p. 23) によれば、希望とは「過去との決別から立ち上がる。そこにはある種の切断があり、過去は解き放たれる」。Bloch (1986, p. 174) はちょっと違った風にしてそれを未来の差別的な威圧への応答と考える。Bloch は、希望とは「そのプロセスの前面に描かれた絵を」開くことであると言う。

希望に満ちていることの配置、あるいはもっと正確に言うなら、空間・時間の減退しつつある組織を混乱させる新たな結びつきが成立することは、すでに「日常生活」の中に埋め込まれたものの地平の上にある未だ来たらぬものの位相的に複雑な空間・時間を開くことによって、現在を変えていく。これは、異質性と複数性の領域としての空間・時間の開示へと至るプロセスにおけるすでに実在する傾向や潜在性により刺激を受けるようになるよう振る舞われた身体より生じる一すなわち Taussig (2002) に従うなら、希望はある種の感覚と類似していると考えられる。たとえば、エマは未来を良いものとして欲望し、重要なことに、到達可能な希望の源泉を示している。その外側は古い友人や家族との実体的な結びつきと名付けられ、それが彼女の生活を支配し、彼女の憂鬱が来たるべき時間と空間において乗り越えられ、彼女にすぐに信頼させている。スティーヴにとってはそこにまだ別の人がいる。Thom

Yorke と私がそれに含まれるだろう。それらの人たちは彼を感じる失望を感じ取り、抑圧されていないものに彼が希望という名前をつけることを可能にしているのであり、その瞬間に、彼が言えや近隣地区に順応する手段を変えていくのだ。その結果、「混乱した世界それ自体が終わりのない状況にあり、またそうした混乱から抜け出るための試験的なプロセスである」(Bloch, 1986, p.221) ことを開示する、「先行の照明」の閃光によって鼓舞される非調和的な経験の場となるのである。未だ来たらぬものの開示—Benjamin (1969) に従えば、「メシア的な空間・時間」とでも名付けられるものの暗示—は希望の実践の間の差異化のポイントである(そこでは外部のアイデンティティが多様である)のだが、それは希望が開かれた未だならぬどこか別の場所とか別の時間との情動的な関係に基づいた特殊な布置として語られることを可能にする。

両方の場合でも、外部なるものを呼び起こす、この行為遂行的なモメントの影響は、希望の配置の増大を誘発する持続する経験の徹底的な色づけを行っていて、そこから希望の名付けが生じ、またそうした希望の名付けがそこへと帰って行く。この情動的な感化のプロセスは、人びとが希望とか絶望として、ある空間や時間の雰囲気を描写するときと融合している。そうした希望とか絶望は、それぞれが今のところは独立しているそれ自身の配置をとおして感得される。しかしスティーヴやエマの場合は、希望はある感情として個人的に感じられるように不確定性の闕へと、瞬間的に横断している。絶対的な不可能性から癒合のプロセスをへて外側へと至る運動は、それを感じたり取り入れたりするように配置された身体と相関関係にある。さもなければ、未だ成らぬ、ということは不可能になる。なぜならそれは内容や形を持たないからである。「余剰はつねに外部である」(Levinas を引用する Bourassa, 2002, p. 72)。相似と制限のプロセスをとおして、全領域にまたがって可能となる潜在性が、希望を思考し名付ける能力によって切り詰められる(Deleuze, 1991)。それゆえ、希望の空間的にも時間的にも配分された物語の出現をとおして、すでに生成されたものの決定の中で希望の感情が固定されるのは、この癒合のプロセスの中なのである。だから、われわれは、資本主義が社会的可動性の上方へ向かう希望によってどのように標記され、また希望されうるものの空間的かつ時間的に可変的な定義への取り組みによって、消費文化が希望の生成と循環のための機械としてどのように機能するのか注意せねばならな

い (Hage, 2003)。弱体化させたり崩壊させたりする諸関係は、依然として存在しているし、希望の対象が焼失するときには損失の理性的感情になるし、希望の対象が実現しないときには失望の理性的感情になる。そうした情動の遭遇という運動の頻度が、未だ成らぬものの危機に対する希望が開いていることを予兆する。すなわち、希望の生成と存在が、未だ「ここと今」に至らぬ何かによって誘発されるように情動的に感じられるような、ある生活への信用と信頼の関係性と関わっている (楽観主義との違いについては Lasch (1991) を参照のこと)。信用の関係をとおして、空間・時間の情動的登記は「わたし自身では生じさせられないものの、わたし自身を開放や生成に開かれた状態にし続けるものとして計画されている」(Stenbock, 2003, p. 8) ものとの接触へと引きずり込まれる。たとえば、現在の物的な困苦という事実に対置して (Lingis, 2002)、あるいは深く、永続する不平等にもかかわらずもう一つの世界の可能性を信じていることによって誘発される抵抗文化において (Parker, 2002)、信頼が立ち上げられるとき、その結果として生じる保証の欠如、そして何かよりよいものへと開かれた希望される身体は、疾病の文脈へと持ち込まれることになる。それぞれの事例では、希望への威圧が「われわれを失望させたり、現実をわれわれの良きものであるとか絶対的に良いものに効果を与えるものとは見えず、われわれが信頼できるものは何もないとする、ペシミスティックな運命論、疑惑へと導く状況から」(Cain, 1963, p. 68, 強調は原文) 現れる。

## 6 終わりに—希望からの思考

しかし、ここでの観念的なものはあらゆる情動をそぎ落とすものではない。むしろそれは熱情である。そうした情動を別の情動へと変化させるのである。

Lloyd (1996, p. 99)

最悪なのはいつも、希望に満ちていることが準備されていることである。それらの生活への信頼は、もしそれが過去の失望を生き延びてこなかったのなら、価値など持たない。未来がさらなる失望をもたらすという知識こそが、絶えざる希望の希求を作り出すのだ。 Lasch (1991, p. 81)

希望は他の情動と感情の循環と転置においてもつれ合っている。その結果、現実の希望は耐久性と可動性のそれぞれ別個の特性を持ち、また希望のよ

り幅広い運動と、希望に満ちていることの配置へと入ったり出たりしている。たとえば、希望の現実化が空間・時間を元気づけるのとちょうど同じように、希望の失望は空間・時間を消去しうるのを考えればよい。にもかかわらず、私は、希望が身体間の質的に異なる一連の諸関係から、それゆえ遭遇の特殊な種別から生じることを描き出そうとしてきた。希望の配置は、未来を、開かれていて、しかも衰退する遭遇における分岐点の中により熱心に住まうための一見したところ矛盾する能力を可能にするものとして示す、宙づりのある関係性として定義することができる。希望の生成はそれゆえ、楽観主義とは違う。それは世界に存在することの中へと変化の空間・時間を誘導するという混乱を喚起されるために、プロセス的な世界によって刺激し、される、一層調和された能力と関係する。希望に満ちるようになることを退屈になることを比較すると、同じような宙づりの運動が見られるのだが、それは意味のなさとか差異のなさの生産をとおして、経験の特質を減退させるために空間・時間を沈静化し、その速度をゆるめている (Anderson, 2004b)。しかし、分岐の契機は、空間・時間を希望に満ちることや希望を失うこととして清めていくプロセスにとって不可欠である。弱体化、脱接続、失望、外部の創造、信用と依存の上演、特殊で明確な希望の創造、希望の生活へのフィードバック、ほかの強度への希望の移動。

希望に取り組むことで、私は本稿で、希望の循環、現前一不在が空間化され時間化されるのか、というより広い研究の照準を押し広げようとした。私の慎重な焦点を本稿では二つの事例に重ね合わせることで、異なる様態—情動、理性的感情、感情がどのように空間・時間を活気づけたり鈍らせたりするのか例証した。理性を越えたもの、あるいは理性を下回るものという出発点を展開することで、非表象的なものへの注目が「人間存在の身体化された特性に関する無名で祝祭的な想念」(Nash, 2000, p. 655)へとすぐさま回帰することに貢献すると議論することができたのである。様態間の差異に注目することで人間存在それ自体を褒めそやすことの不可能性を作り出すことができる。そして非表象的な思考と理性的感情の様式が感じたり明らかにしようとするものに関する新たな特殊性を作り出すことで、文化の観念をより拡張的な「日常生活」という想念で置き換えることができるのである (Seigworth and Gardiner, 2004)。希望の出現は本稿の目的であるばかりでなく、よりラディカルに言えば「未だ来た

らぬもの」の 카테고리の中に埋め込まれた過剰の多様な分節化をめぐって位置づけられる情動の理論の始まりを示すために機能している。私はここで、希望がほかのものが派生する基本的な感情として指摘せねばならないと言っているのではない。これでは理性以上のものに関する多くの説明、Spinoza (1910) の喜びと悲しみの区分から、Tomkins (1995) の情動の八つの、後には九つの核の解明へと展開してきたものを縮小することになる。そうではなく、希望がどのように立ち上がり、それはどのように身体に付随したりそれを動かしたりするのか、ということに注目することで、われわれはわれわれが理性以上のもの、あるいは理性以下のものにどのように取り組むことができるのか、問うことができる。たった一つの関係性の布置から始まるものは不条理な単一性であり、希望の立ち上げはその後の情動のあらゆる語彙の必然的な脱構築を招いていくのである。私は、魅力 (Bennett, 2001)、喜び (Thrift, 2004b)、恥 (Probyn, 2000b)、戸惑い (Game and Metcalfe, 2002) と同じように、希望が情動の理論にとって課題を喚起し、また政治的に情動的であることを最後に示したい。

近年蓄積されている非表象理論の研究では、情動の動きは、文脈の間を移動する余剰、過剰といった特殊な観念の中に位置づけられている。人間という型式に敵対するというよりは、そこには情動とは仮想性の贈答品と類似したものであるという一致した思慮がある。この平均化は、日常生活を表象的な政治学の限界を認識した後で政治的にしていこうという保証として作用する。それとは正反対に、いわば希望から始めることは Massumi (2002a) の自信の議論、あるいは Bennett の魅力の議論もそうなのだが、日常生活の情動性への注目の中にその悲劇の感覚—未だ来ぬものの過剰を持つ多様な意味の一つ—を統合することによって、この理解を補うことである。希望の生成は、弱体化したり破壊したりする特殊な遭遇から出現するのであり、それゆえそれは「プロセスの前面」を感得するのだが、また同時に「それ自体の中で不確実な形で敗北の状況にあり続けている」(Bloch, 1998k p.341)。それゆえ、われわれはどのようにすれば情動の運動や対抗的な動きに対してもう少しだけ憂鬱でありうるのだろうか？代替の考えは、特定の情動の循環的ダイナミクスを示す経費と廃棄の一般的なエコノミーに注目することである (Ahmed, 2004b)。情動の循環がどのように空間的・時間的配分を演じ、またそれによって影響されるかに注目すると、情動のエコノミーの

中心にある不平等性に気づく方法が分かってくる。そうした不平等性は、純粋な像としての情動の伝達と伝染のこれまでの思考が不可能であることを示す。そうすると、われわれは情動を空間・時間の生活へとフィードフォワードしたりバックしたりすることの促進を前提せずに、身体の背景的な理性的感情や感情の発現や制限をどのようにしたら思考できるのか？あまり取られていない理論的な方向が、Tomkins の研究に見られる理性的感情と感情の現象学である。Tomkins は、情動がそれぞれ分けられた駆動方式を類推的に増大させ、「あらゆる情動があらゆる対象を持つ……情動の増大は手段—目的という区分とは異なる。それは楽しむべく楽しみ可能である。それは興奮させるべく興奮している。……情動はあらゆる指示対象をとともなう、あるいはそれなしの、それ自体が正当性を証明するものである」

(Tomkins, 1995; Sedgwick and Frank, 1995, p.7 に引用) と言う。これは、感情がどのようにして特殊で関係的に構築された身体の状態から発生するのかを調べる、近年の神経科学の一部と関わることで補うことができるであろう (Damasio, 2003)。これら二つの研究群からわれわれが得るのは、それらが生物学的なものを本質的なものと見なすことを拒絶し、それゆえ社会的なものへと還元するのではなく、ホルモンや脳のシナプスといったアクタンを構成する、巨大な神経政治的領域を押し広げていることである (Brennon, 2004; Connolly, 2002)。しかしもし社会科学の研究が理性以下のものや理性以上のものと個人的なものを結びつけるリスクを避け、あるいは近年の神経還元主義のプロジェクトと共謀したなら、理性的感情や感情が「発現、コミュニケーション、増大、管理」(Tomkins, 1995, p. 145) の間主体的なプロセスをとおして移動することを概念化することができるある語彙と、この研究を結びつける必要が出てくる。

われわれは、表象の正確な様式よりも、刺激されるそれぞれ異なる収容能力へと傾き、またそれを上演する、情動的文化的政治学の形を提示するところにまでやって来た (Probyn, 2004)。もしわれわれが希望の発生から考え始めるなら、生命は調和的かつ非調和的な諸関係の相互作用的な多様性であるという前提から情動の政治学を始めることになる。情動に対して政治的であることは、「良い遭遇」を作り出し「よりよき何か」を期待する一連の技法の中へ、困苦の情動性への対抗の構築を巻き込んでいかなければならない。けれども、どのようにすればわれわれは、世界への非常に批判的な関与を

印づける悲運の活気なきレトリックを再生産することなく、未だ来ぬものを作り上げる弱体化のベクトル、つまり希望に不可欠な地平へと、関与することができるのだろうか？一つの答えは、日常生活の情動的な変動から学び、そして希望の一定の種別を強めていくことである。なぜなら、困苦の悲劇や不正義がそれぞれそこから生じるからである。思うに、ここにはわれわれが希望と名付けるところの関係の種別が、魅力 (Bennett, 2001) や喜び (Thrift, 2004b) あるいは感情の自由 (Reddy, 2001) や理性的感情の平均化あるいは固定化 (Smith, 2002) といったものに加えて、せめぎ合う調整的な観念となるのには二つの理由がある。第一に、希望の生成の一定のタイプは、よりよい何か、それゆえ潜在性や可能性の、そして他方で同時に「あらゆるものにもかかわらず、存在する世界と和解することがない何か」(Bloch, 1998, p. 341) の輪郭をぼんやり描くことによってどのようなものが生じるのか、という問題を提起する。そのような生成のタイプは、「あるがままの混乱した」世界「がまた、終わることがなく、そうした混乱から生じる実験的プロセスである」(1986, p. 221) ような関与のエートスを刺激しうる。第二に、希望の生成のあるタイプは人生への信頼に相互敵に基づいた特殊なタイプへと帰結する。情動や感情のレベルでの新たな結びつきは、超越と、弱体化のベクトルの中から現れる内在的な超越に味方する、どこかにいつか現れるとの簡単な平均化に疑問を投げかける。

私の議論は希望の生成と存在が、関係性のある種別として上演されたときには、刺激し一刺激されることの中に、Nietzsche (1986) の言葉で言えば、「生の充実」であるような一連のアレンジメントの出現を現す変化が生じることを例証することである。希望はそれ自体良いものであるわけではなく、希望の内在的な価値付けは、第二章で概述した別の様態とプロセスに注目する経験的研究との関係で生じることを覚えておくために、二つの警告がここでは必要である。第一に、希望のある種別は、上演の場となる身体の配置と、希望される内容と同じように示される世界との関係に沿って、問われる必要がある。Spinoza、そしてそれにしたがう Nietzsche にとって、希望のある種別は、悲しみの関係し絵を喜びの遭遇で置き換えるという倫理的な任務を、おそらく永久に遅らせる方法に過ぎない。第二に、この警告に続いては、希望の上演が不正義の関係に触媒作用を及ぼすときには、多くの原因がある。たとえば、希望が現在の新保守主義を作り上げるプロセスであ

り実践の一部であることを考えればよい。George Bush が「イラクの自由作戦」の演説で、たとえば、「われわれはイラクで長く苦しむ人たちに救いをさし続けているのであり、われわれはそれ以上の何か、希望をもたらしている」(president's radio address, 5 April 2003)。ここでは希望をもたらす行為が、現在の地政学の文脈においては義務のネットワークの中に絶望を結びつけていく、希望と絶望の区分を作り出している。こうした二つの警告は希望の生成と存在と結びつく保証の欠如を示している。にもかかわらず、情動の変調の技芸を助長しうるために、生は「それ自体の中で不確実な形で敗北の状況にあり続けている」けれども、それは依然として「未だ来ぬ場所、入口であり最終的な中身が揺るぎなき不確実性によって記される場所にある」(Bloch, 1998, p.341) ことが、希望にとっては不可欠なのである。

謝辞省略

## 文献

- Ahmed S, 2001, "The organisation of hate" *Law and Critique* 12 345-365
- Ahmed S, 2004a, "Collective feelings. Or, the impressions left by others" *Theory, Culture and Society* 21(2)25-42
- Ahmed S, 2004b *Cultural Politics of Emotion* (Edinburgh University Press, Edinburgh)
- Amin A, Thrift N, 2002 *Cities: Reimagining the Urban* (Polity Press, Cambridge)
- Anderson B, 2004a, "Recorded music and practices of remembering" *Social and Cultural Geography* 51-19
- Anderson B, 2004b, "Time stilled — space slowed: how boredom matters" *Geoforum* 35 739 - 754
- Anderson B, 2005, "Practices of judgement and domestic geographies of affect" *Social and Cultural Geography* 6 645 - 660
- Anderson K, Smith S, 2001, "Emotional geographies" *Transactions of the Institute of British Geographers, New Series* 26 7 - 10
- Ansell Pearson K, 1999 *Germinal Life: The Difference and Repetition of Deleuze* (Routledge, London)
- Bataille G, 1985 *Visions of Excess: Selected Writings 1927-1939* Ed. A Stoekl, translated by A Stoekl, C Lovitt, D M Leslie Jr (Manchester University Press, Manchester)
- Benjamin W, 1969, "Thesis on the philosophy of history", in *Illuminations* translated by H Zorn (Pimlico, London) pp 245-255
- Bennett J, 2001 *The Enchantment of Modern Life.*

- Attachments, Crossings and Ethics* (Princeton University Press, Princeton, NJ)
- Bloch E, 1986 *The Principle of Hope volumes 1 -3*, translated by N Plaice, S Plaice, P Knight (Blackwell, Oxford)
- Bloch E, 1998, "Can hope be disappointed?", in *Literary Essays* translated by A Joron (Stanford University Press, Stanford, CA) pp 339-345
- Bourassa A, 2002, "Literature, language and the non-human", in *A Shock to Thought: Expression after Deleuze and Guattari* Ed. B Massumi (Routledge, London) pp 60 - 76
- Brennon T, 2004 *The Transmission of Affect* (Cornell University Press, Ithaca, NY)
- Brown S, Stenner P, 2001, "Being affected: Spinoza and the psychology of emotion" *International Journal of Group Tensions* 30(1) 81 - 105
- Caille A, 2001, "The double inconceivability of the pure gift" *Angelaki: Journal of the Theoretical Humanities* 6(2) 23 -39
- Cain S, 1963 *Gabriel Marcel* (Bowes and Bowes, London)
- Capital and Class* 2003, "The geographies and politics of fear" 80 (Summer) (special issue)
- Connolly W, 1999 *Why I Am Not a Secularist* (University of Minnesota Press, Minneapolis, MN)
- Connolly W, 2002 *Neuropolitics: Thinking, Culture, Speed* (University of Minnesota Press, Minneapolis, MN)
- Damasio A, 1994 *Descartes' Error: Emotion, Reason and the Human Brain* (Picador, Basingstoke, Hants)
- Damasio A, 2003 *Looking for Spinoza: Joy, Sorrow and the Feeling Brain* (Harcourt, Orlando, FL)
- Davidson J, 2003, "Putting on a face": Sartre, Goffman, and agoraphobic anxiety in social space" *Environment and Planning D: Society and Space* 21 107 -122
- DeLanda M, 2002 *Intensive Science and Virtual Philosophy* (Continuum, London)
- Deleuze G, 1978, "First seminar on Spinoza", <http://www.webdeleuze.com/php/texte.php?cie=14&groupe=Spinoza&langue=2>
- Deleuze G, 1988a *Spinoza: Practical Philosophy* translated by R Hurley (City Lights Books, San Francisco, CA) 『スピノザ：実践の哲学』(鈴木雅大訳、平凡社、1994)
- Deleuze G, 1988b *Foucault* translated by S Hand (Continuum, London/New York) 『フォーコー』(宇野邦一訳、河出書房新社、1987)
- Deleuze G, 1991 *Bergsonism* translated by H Tomlinson, B Habberjam (Zone Books, New York) 『ベルクソンの哲学』(宇波彰訳、法政大学出版局、1974)
- Deleuze G, 1998, "Spinoza and the three ethics" *Essays Critical and Clinical* translated by D Smith, M Greco (Athlone Press, London)
- Deleuze G, Guattari F, 1994 *What is Philosophy?* translated by G Burchell, H Tomlinson (Verso, London)
- Dewsbury J-D, 2000, "Performativity and the event: enacting a philosophy of difference" *Environment and Planning D: Society and Space* 18 473 - 496
- Dewsbury J-D, 2003, "Witnessing space: 'knowledge without contemplation'" *Environment and Planning A* 35 1907 -1932
- Diprose R, 2002 *Corporeal Generosity* (Routledge, London)
- Fraad H, 2000, "Exploitation in the labour of love", in *Class and its Others* Eds J-K Gibson-Graham, S Resnick, R Wolff (University of Minnesota Press, Minneapolis, MN) pp 69 - 86
- Game A, Metcalfe A, 2002 *The Mystery of Everyday Life* (Federation Press, Annandale, NSW)
- Gardiner M, 2000 *Critiques of Everyday Life* (Routledge, London)
- Gatens M, Lloyd G, 1999 *Collective Imaginings: Spinoza Past and Present* (Routledge, London)
- Gibson-Graham J-K, 1996 *The End of Capitalism (As We Knew It): A Feminist Critique of Political Economy* (Blackwell, Oxford)
- Grossberg L, 1992 *We Gotta Get Out of this Place: Popular Conservatism and Postmodern Culture* (Routledge, New York)
- Grossberg L, 1997 *Dancing in Spite of Myself: Essays on Popular Culture* (Duke University Press, Durham, NC)
- Hage G, 2003 *Against Paranoid Nationalism: Searching for Hope in a Shrinking Society* (Pluto Press, Annandale, Queensland)
- Harvey D, 2000 *Spaces of Hope* (Edinburgh University Press, Edinburgh)
- James W, 1982 *The Varieties of Religious Experience* (Penguin Books, Harmondsworth, Middx)
- Katz J, 1999 *How Emotions Work* (Chicago University Press, Chicago, IL)
- Koskela H, 2000, "The gaze without eyes: video-surveillance and the changing nature of urban space" *Progress in Human Geography* 24 243 - 265
- Kumar A, 2000, "Foreword: in class", in *Class and its Others* Eds J-K Gibson-Graham, S Resnick, R Wolff (University of Minnesota Press, Minneapolis, MN) pp vii-xiii
- Lasch C, 1991 *The True and Only Heaven: Progress and Its Critics* (W W Norton, New York)
- Latham A, with Conradson D, 2003, "The possibilities of performance" *Environment and Planning A* 35 1901 -1906
- Lee R, Leyshon A, Williams C (Eds), 2003 *Alternative Economic Spaces* (Sage, London)
- Lingis A, 2002, "Murmurs of life", in *Hope: New Philosophies for Change* Ed. M Zournazi (Pluto Press, Annandale, Queensland) pp 22 - 42



- Lloyd G, 1996 *Spinoza and the Ethics* (Routledge, London)
- Lupton D, 1998 *The Emotional Self: A Sociocultural Exploration* (Sage, London)
- McCormack D, 2002, "A paper with an interest in rhythm" *Geoforum* 33 469-485
- McCormack D, 2003, "An event of geographical ethics in spaces of affect" *Transactions of the Institute of British Geographers, New Series* 4 488 - 507
- Marcel G, 1965 *Being and Having translated by A Black* (Collins, Glasgow)
- Marcel G, 1967, "Desire and hope", translated by N Lawrence, in Readings in *Existential Phenomenology* Eds N Lawrence, M O'Connor (Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ) pp 277-286
- Marks L, 2000 *The Skin of Film* (Duke University Press, Durham, NC)
- Massumi B, 2002a *Parables for the Virtual: Movement, Affect and Sensation* (Duke University Press, Durham, NC)
- Massumi B, 2002b, "Navigating movements", in *Hope: New Philosophies for Change* Ed. M Zournazi (Pluto Press, Annandale, Queensland) pp 210-244
- Massumi B, 2002c, "Introduction, like a thought", in *A Shock to Thought: Expression after Deleuze and Guattari* Ed. B Massumi (Routledge, London) pp xiii - xxxix
- Nash C, 2000, "Performativity in practice: some recent work in cultural geography" *Progress in Human Geography* 24 653 - 664
- Nietzsche F, 1986 *Human all too Human* volume 1, translated by R J Holland (Cambridge University Press, Cambridge) 『人間的な、あまりに人間的な 1』
- Nunn K, 1996, "Personal hopefulness: a conceptual review of the relevance of the perceived future to psychology" *British Journal of Medical Psychology* 69 227-245
- O'Sullivan S, 2001, "The aesthetics of affect: thinking art beyond representation" *Angelaki: Journal of the Theoretical Humanities* 6(3) 125 -135
- O Tuathail G, 2003, "Just out looking for a fight": American affect and the invasion of Iraq" *Antipode* 35 856-870
- Parker M (Ed.), 2002 *Utopia and Organization* (Blackwell, Oxford)
- Parse R, 1999 *Hope: An International Human Becoming Perspective* (Jones and Bartlett, Sudbury, MA)
- Pieper J, 1994 *Hope and History* translated by D Kipp (Ignatius Press, San Francisco, CA)
- Potamianou A, 1997 *Hope: A Shield in the Economy of Borderline States* (Routledge, London)
- Probyn E, 2000a *Carnal Appetites: FoodSexIdentities* (Routledge, London)
- Probyn E, 2000b, "Shaming theory, thinking dis-connections: feminism and reconciliation", in *Transformations: Thinking Through Feminism* Eds S Ahmed, J Kilby, C Lury, M McNeil, B Skeggs (Routledge, London) pp 48 - 60
- Probyn E, 2004, "Eating for a living: a rhizo-ethnology of bodies", in *Cultural Bodies: Ethnography and Theory* Eds H Thomas, J Ahmed (Blackwell, Oxford) pp 215-240
- Pugmire D, 1998 *Rediscovering Emotion* (Edinburgh University Press, Edinburgh)
- Reddy W, 2001 *Navigation of Feeling: A Framework for the History of Emotions* (Cambridge University Press, Cambridge)
- Roberts J, 1999, "Philosophizing the everyday: the philosophy of praxis and the fate of cultural studies" *Radical Philosophy* 98 87 - 109
- Sedgwick E FC, Frank A, 1995, "Shame in the cybernetic fold: reading Silvan Tomkins", in *Shame and its Sisters: A Silvan Tomkins Reader* (Duke University Press, Durham, NQ) pp 1 - 28
- Seigworth G, 2000, "Banality for cultural studies" *Cultural Studies* 14(2) 227 - 268
- Seigworth G, Gardiner M, 2004, "Rethinking everyday life: and then nothing turns itself inside out" *Cultural Studies* 18(2/3) 139-159
- Smith S, 2002, "Towards a manifesto for feelings" *Soundings* 20 102-116
- Social and Cultural Geography* 2004, "Emotional geographies" 5(4) (special issue)
- Solomon R, 1992 *The Passions: Emotions and the Meaning of Life* (Hackett, Indianapolis, IN)
- Spinks L, 2001, "Thinking the post-human: literature, affect and the politics of style" *Textual Practice* 15(1) 23 -46
- Spinoza B, 1910 *Ethics and the Treatise on the Correction of the Intellect translated by A Boyle* (J M Dent, London) 『エチカ』
- Stenbock A, 2003, "Hoping against hope", in *Essays in Celebration of the Founding of the Organization of Phenomenological Organizations* Eds. C-F Cheung, I Chvatik, I Copoeru, L Embree, J Iribarne, H R' Sepp, online at <http://www.o.p.o.net/essays/StenbockArticle.pdf>
- Stern D, 1983 *The Interpersonal World of the Infant* (Karmac, London)
- Taussig M, 2002, "Carnival of the senses", in *Hope: New Philosophies for Change* Ed. M Zournazi (Pluto Press, Annandale, Queensland) pp 42-63
- Terkel S, 2004 *Hope Dies Last* (New Press, New York)
- Thien D, 2004, "Love's travels and traces: the 'impossible' politics of Luce Irigaray", in 'Gender and Geography' Reconsidered: Women and Geography Study Group Eds K Browne, J P Sharp, D Thien, CD-ROM, pp 43-48
- Thrift N, 2000, "Afterwords" *Environment and Planning D: Society and Space* 18 213 - 255
- Thrift N, 2003a, "Performance and ..." *Environment and Planning A* 35 2019-2024
- Thrift N, 2003b, "Practising ethics", in *Using Social Theory* Eds M Pryke, G Rose, S Whatmore (Sage, London) pp 105- 121

- Thrift N, 2004a, "Intensities of feeling: towards a spatial politics of affect" *Geografiska Annaler, Series B: Human Geography* 86(1) 57-78) 「感情の強度—情動の空間的政治学に向けて—」(森正人訳、『空間・社会・地理思想』第12号, 58-82頁, 2008)
- Thrift N, 2004b, "Summoning life", in *Envisioning Human Geography* Eds P Cloke, P Crang, M Goodwin (Arnold, London) pp 81-103
- Tomkins S, 1995, "Shame - humiliation and contempt - disgust", in *Shame and its Sisters: A Silvan Tomkins Reader* Eds E Kosofsky-Sedgwick, A Frank (Duke University Press, Durham, NC) pp 133-179
- Waterworth J, 2003 *A Philosophical Analysis of Hope* (Palgrave Macmillan, Basingstoke, Hants)
- Whatmore S, 2002 *Hybrid Geographies* (Sage, London)
- Widder N, 2000, "What's lacking in the lack: a comment on the virtual" *Angelaki: Journal of the Theoretical Humanities* 5(3) 117-138
- Williams S, 2001 *Emotion and Social Theory: Corporeal Reflections on the (Ir)Rational* (Sage, London)

### 短い解説(森 正人)

本稿は Ben Anderson の 'Becoming and being hopeful: towards a theory of affect' の全訳である。翻訳に当たっては、原文をそのまま訳すというよりは、こちらで一文を複数に分けて、できるだけ意味を日本語として成立させることを目的とした。しかし、それでも依然として翻訳文が難しいのにはいくつかの理由がある。第一は、アンダーソンの文章それ自体が、一文をいくつもの関係詞でつなぎながら構成する文体であるために、おそらく英語を母国語とする人にも非常に読みにくいからである(日常会話は非常に分かりやすくフランクだが、非常に早口でもある)。第二は、情動の議論それ自体の複雑さに由来するものである。第三にはアンダーソンらが依拠するドゥルーズやときにはデリダの用語を持つ理解の難しさであると思われる(折り畳むとか、印づけるとか)。そうした難しさにもかかわらず本稿を翻訳したのは、この論文が現在の英語圏の人文地理学、人文地理学に与えている影響力を勘案してのことである。この論文が掲載された *Environment and Planning D* 誌は、よく知られるとおり、地理学に限定されずに広く空間と自然を検討するための場として機能している。その雑誌のウェブサイトには 2008 年の時点でもっとも頻りにダウンロードされた論文 30 本が掲載されており、本稿は其中で 10 位に位置づけられている。リストに並ぶ論文は、

いわゆる大御所によって書かれたものが多いことを勘案すれば、「若手」に位置づけられるこの論文の執筆者アンダーソンは異色である。

2004 年 9 月から勤めているダラム大地理学部のウェブサイトを見れば、おそらく PhD 論文を執筆中の 2002 年の *Geografiska Annaler B* に掲載された 'Principle of Hope: Recorded Music, Listening Practices and the Immanence of Utopia' を皮切りに、若手と呼ぶには十分すぎるほどの査読誌への掲載論文を持っている。2009 年に出版された *Dictionary of Human Geography* では Affect、Emotional Geographies、Non-representational Theory の項目を担当するなど、情動や非表象理論の議論では重要な論客であるとみなされている(スリフトとの年齢差を考えればよい)。そして、2010 年には後述する同僚のポール・ハリソンと *Taking-Place: Non-Representational Theories and Human Geography* を Ashgate 社から出版する予定となっている。

すでに本誌『空間・社会・地理思想』12号にこのアンダーソンとディヴィア・トーリア・ケリーによる論文の翻訳が掲載されている(森正人訳「社会・文化地理学における問題/物質」)。両名とも今はイギリス北東部のダラム大学地理学部に勤務する講師であり、英語圏の物質性と地理に関する議論においては知的源泉のいくつかを構成し続けている。アンダーソンは本稿の謝辞で、この論文の議論は、その地理学部の研究グループの一つ、Social / Spatial Theory で重ねられたものであることを記している。現在、この学部にはこのほかに 4 つの人文地理学の研究グループがあり、しかも学部構成員は複数のグループに所属しながら議論を深めている。トーリア・ケリーは現在、別の研究グループ、Lived and Material Culture のとりまとめをしており、アンダーソンもそこに所属している(そして訳者もそのグループに所属していた)。

訳者はかつてトーリア・ケリーに、アンダーソンと彼女が用いる Matter という語の意味をたずねたことがある。そのとき彼女は自身の用法を文化唯物論の流れに位置づけ、触知可能なものとしたのに対し、アンダーソンのそれはより哲学的で必ずしも触知可能なものではないと答えた。両者とも物質性を論じるが、トーリア・ケリーがあくまで絵画や庭園や植物など可視的なものを手がかりに「ホーム」の地理的想像力を論じるのに対し、アンダーソンは音楽という不可視のものを「聞く」行為がどのようにホームの感覚や退屈さの感覚を作り出すのかを例に

しながらそれを行なう。トーリア・ケリーはそれをおして、ポストコロナルな身体と場所感覚を明らかにするのに対し、アンダーソンは生成の議論へとまっすぐ入っていくのである。

すでに訳者は1990年代以降の英語圏の人文地理学における議論について紹介しており(森2009)、そこで重要なトピックとして可能的な物質の痕跡である物質性を取り上げている。簡単に言えば、それは主体の役割を客体にまで延長するというものではなく、主体/客体という区分それ自体、および「主体」という観念を失効させ、またそうした区分の間で生成されるものの可能性に注目する。そもそも、物質性と情動の議論はともに出来事のプロセスに注目することで根を同じくしている(森2010)。予見不可能な出来事は、その都度、時間と空間を作り直していくと同時に、自己と他者の区分も作り出していく。そうした出来事は事物や自然と人間との関係性の中で絶えず生じるのであり、そのときに自己は空間化されながら自己を形成し直す。情動や感情は、そうした出来事によって決定不可能な形で刺激を受けながら誘発され、自己の空間・間隔化を差延として作り上げていくのである。このとき、首尾一貫した身体空間も、その内と外という区分もなくなっている。

したがって、近年、盛んに議論される物質性や情動や感情は、かつての物質文化への注目や、現象学に刺激を受けながら展開した人間主義地理学ではない(そうした人間主義そのものが疑われている)。現象学的還元を繰り返しても自己や主体にはたどり着けないし、記号や構造の諸要素が首尾一貫しているわけではなく、つねに可能的に戯れる。このことを理解しなければ、英語圏地理学への参入や、それへの対抗言説も不可能である。

アンダーソンは先述のダラム大の地理学部における *Social / Spatial Theory* 研究グループの活動として、同僚のポール・ハリソン(ウィトゲンシュタインの空間論等)やレイチェル・コール(衣服の寸法の物質性研究等)らとともに2007年1月10・11日の両日に、ダラム大で *Theorising Affect* という会議を開いている。ここで問われていたのは、(1) 情動の理論が何を社会科学や人文学にもたらしうるのか(2) 情動と、理性を越えたあるいは理性以下の様態(雰囲気、理性的感情、感情、情熱、記憶、言語)、さらに非人間との関係とはどのようなものか(3) 情動の語彙や文法をどのように作り出すことができるのか(4) 情動の理論と政治理論(主権、ヘゲモニー、イデオロギー)や倫理の理論(不正義、

他性)との関係性はどのようなものか、ということであった。今、この会議のペーパーを開いてみると、基調講演者として、初日には *Seigworth (Immanent, Extruded, Unsettling and Otherwise)* と *Ahmed (The Promise of Happiness)*、二日目には *Thrift (Halo)* と *Clough (In between)* が招かれており(当時の私はまだ情動の議論について馴染みがなく、したがって基調講演者たちの面々についてもスリフトしか知らず、他の論者が何を話していたかについても全く記憶がない)、これらの論者は、本稿の議論でも繰り返し言及されている。

本稿は、音楽の物質性が希望という感情を刺激していることを理論的に追求していくのだが、そこで賭けられているのは希望という感情や情動が誘発される時に、主体なるものがどのように可能的に立ち上がるかということである。すなわち、問題は、希望という特定の感情の刺激・誘発・生成ではなく、主体なるものの生成なのである。それは本稿を読み進めれば分かることではあるが、本稿で取り上げられているデボラ・ティエンの別の論文(2005)への批判においてもはっきりと現れている。

アンダーソンは先に述べたダラム大の同僚ポール・ハリソンとともにティエンの情動論を批判し、はっきりと斥ける(*Anderson and Harrison 2006*)。彼らが批判するのは、感情をそれが構成される以前の社会的構造の症状として機能すると解釈している点、つまり、感情を社会に対して二次的なものと見なすことで、説明的なカテゴリーを立ち上げ自然化してしまっていることである。また、感情を関係的な生成物としているものの、感情の種別間の関係性について沈黙していることも批判される。彼らは、愛とか退屈とか希望とかといった感情の間の差異、その家計学、状況、可能性、物質性を認識することで「感情的なもの」と呼ばれる不定型な対象物を捉えることができると考えているのである。こうした批判的視野をおして彼らは、システム、ホルモン、映画、貨幣などの物質性を介してあらゆる場所へと広がる感情や情動の空間化がはらむ政治性を強調していく。感情や情動は空間化するものであり、本稿でも希望の感情が空間・時間化することが繰り返し述べられている。なぜ、空間化に注目する必要があるのか。それは彼らが地理学で仕事をしているからではなく、空間化に注目しなければ、観念論的な物象化の危険性を孕むからである。

ではなぜ、空間化に注目することで、観念論的な物象化のリスクを回避できるのだろうか。その理由へと至る道筋はいくつかあるだろうが、ここでは

アンダーソンが依拠するドゥルーズの思想に注目してみたい。本稿の参考文献にも挙がっているベルグソンを読み直す中で、ドゥルーズは、一言で言えば物質をとおして時間と空間を再びかみ合わせようとしている。ベルグソン (2007) は精神・悟性と身体を二元論的に捉えることを棄却し、物質の中に与えられている「以上のもの」をイメージとして知覚することができるとした。現在の議論からすればこの物体のイメージは物質性の一つの現れと考えることができるだろう。そうしたイメージの知覚は身体と物体それぞれの (非) 延長、すなわち空間の延長をとおして感得される。ただ、ベルグソンにおいては、延長は運動の持続によって行われるのであり、(あらゆるものが並置され、すなわち差異化されている) 空間はそうした運動の土台を提供する固定されたものと見なされている。ドゥルーズ (1974) はしかし、ベルグソンが時間の下へと位置づける空間とは、既成のものと考えられる空間であり、そうした空間の四次元性を時間とする考え方をベルグソンは否定したとする。ドゥルーズのベルグソン解釈にとって、空間は物質や延長を可能にするものではなく、物質や延長が空間の出現を可能にするのであり、すなわち時間の単一性、その持続の中で空間が現れるのである。差異は所与ではなく、単一性・統一性における生成の持続的プロセスの中での刺激や強度によって現れる。

情動<sup>アフェクト</sup>とはこのような生成の刺激・変様<sup>アフェクチオ</sup>によって生成されるものであるが、それは外部を持たず、一つの状態から他の状態への移行・推移を示す語である (ドゥルーズ 1994)。刺激・変様はそれを刺激する外部的な身体の前を前提するのだが、情動は「外部」にある身体を作り上げていく持続的な過程である (それはベルグソンの語法で言えば「イメージ」となる)。情動が外皮を作っていくのである (森 2010)。ここで情動の問題は「主体」の問題に内的に交差する。アンダーソンが本稿でさかんに「空間・時間」という語を用いているのは、地理学者としての空間の防護では決してない。時間と空間はともにかみ合っているのである。ドゥルーズは「主体」についてのあるとても短いエッセイで、この空間・時間という変数のおかげで、人格や「自我」へと収斂しないそのものの個別性、「このもの性」の役割を検討することができるようになったことを強調する。単数的なものであるこのもの性は、さまざまな他者たちとある規則のなかで接続していくのであり、そうした空間的「配置」が重要になる。ある出来事によってどのような単数性の配置が、どのよ

うな速度や強度をとおして、ときに複数化されながら形成されるのか、これこそがドゥルーズにとって主体なる概念を棄却するために必要な作業となる。ついでに言えば、ドリー・マッシーはこのドゥルーズ的な空間論を、さらにデリダの間隔・空間化と友愛のポリティクスの議論、つまり差延の議論をとおして積極的に展開するのである (実際、アンダーソンはマッシーの著書 *For Space* を地理学の重要文献を紹介する書籍 *Key Texts in Human Geography* で取り上げている)。このほかにも、本稿でも取り上げられているスリフトの非表象理論や情動理論との関係、アンダーソンやコールらがシェフィールド大学で学位を取ったことを勘案すれば、ピーター・ジャクソンとの関係などにも (個人的な) 関心がおよぶが、そうしたことはまた別の機会に考えてみたい。

近年、「関係性の地理学」という語が日本においても用いられるようになってきた。関係性という語が、単にそれぞれが関係しているという意味だけでなく、内と外、「主」体なるものを問い直すために用いられることを期待したい。

## 文献

- Anderson B and Harrison P, 2006, Questioning affect and emotion. *Area* 38-1 333-335.
- ベルグソン H, 2007, 『物質と記憶』, 合田正人・松本力訳 (筑摩書房, 東京) .
- ドゥルーズ G, 1974, 『ベルグソンの哲学』, 宇波彰訳 (法政大学出版局, 東京) .
- ドゥルーズ G, 1994, 『スピノザ実践の哲学』, 鈴木雅大訳 (平凡社, 東京) .
- ドゥルーズ G, 1996, 哲学的概念, 松葉祥一訳, ナンシー, J 編, 『主体の後に誰がくるのか?』 143-145
- Massey D, 2005, *For Space* (Sage, London) .
- 森 正人, 2009, 言葉と物—英語圏人文地理学における文化論的転回以降の展開—. *人文地理* 61-1 1-22.
- 森 正人, 2010, 変わりゆく文化・人間概念と人文地理学. 村山祐司編, 『空間の文化地理』 (朝倉書店, 東京) (forthcoming)